



京都大学
医学研究科・
医学部

京都大学医学研究科・医学部

創立125周年記念誌

Graduate School of Medicine
and Faculty of Medicine, Kyoto University

125th Anniversary



創立125周年を迎えて

京都大学医学研究科・医学部は、明治32(1899)年に京都帝国大学医科大学として設置されてから令和6(2024)年で創立125周年を迎えます。

その間、我が国を代表する医学研究科・医学部の一つとして、「医学・医療にかかわる領域における独自の『知の創造』とその絶え間ない『実社会への還元』によって人類の健康と福祉の向上に貢献すること、および、その牽引力となる国際的なリーダーとなる人材を育成すること」という使命を実行して参りました。

この創立125周年を新たな飛躍の契機とすべく、三つの事業を柱とした記念事業を計画しております。

事業の第一は、スポーツやワークショップが実施できる「多目的施設」の建設です。多種多様な学生及び教員等の交流から生まれる知の融合や人間力の形成を目的とした施設を目指します。

第二に、竣工より13年が経過した学生会館の設備改修を行います。学生会館のコンセプトである医学部内のコミュニティー活動の更なる活性化を目指します。

第三に、その他の医学内厚生施設の改修・更新等を行います。上記の2施設とも関連させ、学生等のキャンパスライフの更なる充実を目指します。

創立125周年を機に、このような学内の福利厚生環境を改善し、次世代のグローバルリーダーの育成、及び、広く社会と人間行動を理解し病める人の感情を洞察できる人間、社会全体の健康を目指し高い倫理観を持って行動する医師・研究者の育成に一層尽力して参ります。

京都大学医学研究科・医学部の未来に向けた発展のため、今後一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

京都大学大学院医学研究科長・医学部長
伊佐 正



京都大学医学研究科・医学部の創立125周年にあたり、心よりお祝い申し上げます。

その歴史は、1899(明治32)年に京都帝国大学医科大学が設立されたことに遡ります。

丁度25年前、当時医学研究科長・医学部長であった本庶佑現特別教授の命を受けて、創立100周年記念アルバム「近衛町無番地」の編纂にあたったことが、昨日のことにように思い出されます。

本医学研究科・医学部は、独創的な開拓精神に基づく数多くの画期的な研究成果を誇る輝かしい百年の歴史を引き継ぎ、その後の四半世紀の間に、さらにめざましい成果によって医学の新領域を開拓してこられました。

とくに山中伸弥教授のiPS細胞研究や本庶佑特別教授のがん免疫研究は、医学医療の世界に新しいページを開くものであり、今やふたりのノーベル医学・生理学賞受賞者を擁する世界的な

医学研究機関となっています。この背景には、現役の教職員のみならず医学同窓会(芝蘭会)や校友会など多くのみなさんの、研究と教育への深いご理解とたゆみないご支援があり、芝蘭会館や基礎医学記念講堂・医学部資料館(旧解剖学講堂)、学生会館などの設立はその象徴と言えるでしょう。

さらに近年の、画期的創薬をめざす産学共同や国際連携活動は、我が国の医学研究開発の先駆モデルとなっていますし、今年は附属がん免疫総合研究センターの新研究棟も完成します。

来るべき新しい四半世紀に向けて、この伝統ある京都大学医学研究科・医学部には、独創的な研究と世界の医学研究をリードしていく次世代人材の養成によって、人々の健康と福祉の向上に引き続き大きな貢献を続けていただくことを、心から期待しております。

京都大学総長
湊 長博

京都大学医学研究科・医学部
創立125周年に寄せて



京都大学医学研究科・医学部の
創立125周年を祝して

医学部並びに医学研究科の創立125周年、心からお慶び申し上げます。

京都大学は臨床、基礎ともに日本の研究をリードして参りました。

臨床部門では、芸妓の化粧品として使われる白粉の中に鉛が大量に混じっており、大変な被害を撒き散らしているという平井毓太郎先生の重要な発見がありました。

私が何よりも誇りに思っているのは、ハンセン病の研究において当時助教授であった小笠原登先生の功績です。小笠原先生がハンセン病はゆっくりと感染を起こすのだが主として自己の免疫反応によって起こる症状であり、大袈裟な隔離政策は必要ないというビジョンを示されたにも拘らず、当時強引に国家ぐるみの隔離政策が進められた結果、今日の様々な問題が起りました。幸いにも、戦後、本学出身の大谷藤郎元厚生省医務局長がこの政策の誤りを認め撤廃をすることになり、現在ハンセン病患者の正当な権利が認められるようになりました。

臨床、基礎の融合の例として、高月清先生の成人T細胞性白血病(ATL)という疾患概念の確立、そしてその原因がウイルスであるという日沼頼夫先生の発見、その時に表面に強発現されるTac抗原を内山卓先生が発見され、その正体がIL-2受容体アルファ鎖であるということを私がみつけたのも、この流れの中であり得たことです。

基礎部門では、病理学の藤浪鑑先生による腫瘍ウイルス(藤浪肉腫)の発見、平沢興先生による

京都大学高等研究院 副院長・特別教授
京都大学大学院医学研究科附属
がん免疫総合研究センター センター長
本庶 佑

錐体外路系神経回路の発見、また医化学教室の沼正作先生によるアセチルコリン受容体の構造と機能の解明、それを引き継いだ中西重忠先生によるグルタミン酸受容体の構造発見とその機能の解明、続いて山中伸弥先生による細胞の初期化に必要な遺伝子の発見、そしていわゆるiPS細胞の確立。山中先生はこの発見によって2012年ノーベル生理学・医学賞を受賞されました。また私事で恐縮ですが、抗体遺伝子の再構成に触媒する酵素、活性化誘導シチジンデアミナーゼ(AID)の発見、また免疫を制御するPD-1分子の発見とその癌治療への応用で2018年ノーベル生理学・医学賞をいただきました。京都大学医学部は2人のノーベル賞受賞者を輩出した日本で唯一の医学部となっております。

このような輝かしい伝統を生んだ京都大学医学部の歴史と風土を大切に、世界のトップレベルの研究機関としての位置を一層確立していられることを切に望んでおります。



撮影：関野欣次

人生100年の時代に向けて
世界に羽ばたく若者たちを

建築家
安藤 忠雄

京都大学医学研究科・医学部創立125周年、おめでとうございます。

「京大医学部」について深く知ることになったのは、湊長博総長との交流がきっかけでした。湊先生は著名な免疫学者であると同時に京大総長という立場でありながら、それを感じさせない気さくな人柄で、広い視野を持って我々の話も真剣に聞いていただける懐の深い方です。大学のあり方や社会・教育の未来について、たくさんのお話を伺う中で、日本の医学教育と研究の最先端を歩み続ける京都大学医学研究科・医学部の取り組みについても理解を深めることができました。

「京大医学部」といえば、ノーベル生理学・医学賞を受賞された本庶佑先生や山中伸弥先生に代表されるような、世界に誇る優秀な医学者・研究者が数多く所属し、常に新しい世界を切り拓きながら、その歴史を通して、医学の発展に多大なる功績を残してこられました。125年にもわたる努力と研鑽に深く感謝するとともに、未来に向けてのさらなる飛躍を期待しています。

人生100年という来るべき新しい時代に向けて、医療福祉に関わる人々の重要性は、より一層大きくなっています。京都大学医学研究科・医学部がこれからも革新を続け、独創性と直感力を持って世界に羽ばたく優秀な人材を数多く輩出して下さることを、心から願っています。

医療の道を目指す若者たちに、希望の光を与え続けてください。



京都大学医学研究科・
医学部創立125周年を祝して

京都大学iPS細胞研究所 名誉所長・教授
山中 伸弥

京都大学医学研究科・医学部が創立125周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。長きにわたり医学研究と医療の発展に多大な貢献をされ、多くの優れた医師や研究者を輩出されてきましたことに、深く敬意を表します。本庶佑特別教授のがん免疫研究をはじめ、数々の新たな医学領域を切り拓いてこられたことは、世界に誇れるものです。

私たちiPS細胞研究所では、医学研究科の協力講座として多数の大学院生を受け入れ、活躍していただいておりますし、医学部学生にはマイコースプログラムで研究活動を体験していただいております。若者の新しいアイデアは革新的な研究を創出するためには非常に重要です。このような活動を通じて、引き続き将来の医学研究を担う若手研究者の育成に貢献する所存です。また医学部附属病院におきまして、弊所の研究成果に基づいた多数の臨床研究・治験を実施していただいておりますことに、この場をお借りして御礼を申し上げます。

今後も多くの優秀な研究者や学生が医学研究科・医学部に集い、医学・生命科学の進展や人類の健康と福祉の向上に貢献されることと存じます。私たちが共に歩み、iPS細胞の医療応用に向けて、一層の努力を続けて参ります。京都大学医学研究科・医学部のさらなるご発展をお祈りし、お祝いの言葉とさせていただきます。

京都大学医学研究科・医学部は1899(明治32)年9月に京都帝国大学医科大学として開設して以来、2024年(令和6年)に創立125周年を迎えます。これまでの学びの歴史を年表で振り返ります。

125
TH

1897

明治30年
京都帝国大学創立

1947

昭和22年
京都帝国大学を
京都大学と改称

1975

昭和50年
京都大学医療技術
短期大学部設置

1999

平成11年
医学部創立
百周年



山中 伸弥先生 © Nobel Media AB Photo: Alex Ljungdahl



本庶 佑先生 © Nobel Media AB Photo: Alexander Mahmoud

2018

平成30年
本庶 佑名誉教授が
ノーベル生理学・
医学賞を受賞

2012

平成24年
山中 伸弥教授が
ノーベル生理学・
医学賞を受賞

2003

平成15年
医学部に
保健学科を設置



京都大学医学部創立100周年記念アルバム「近衛町無番地」

2024

令和6年
大学院医学研究科に
ヘルスセキュリティセンターを設置

2022

令和4年
大学院医学研究科に
医療DX教育研究センターを設置

2020

令和2年
大学院医学研究科に
がん免疫総合研究センターを設置



2024年4月竣工
がん免疫総合研究センター Bristol Myers Squibb 棟

2018

平成30年
京都大学・
マギル大学
ゲノム医学
国際連携
専攻を設置

2016

平成28年
医学部医学科に
MD研究者育成
プログラムを開設

2004

平成16年
京都大学は
国立大学法人京都大学
となった

2000

平成12年
社会健康医学系
専攻を設置

2015

平成27年
医学部において特色入試を開始

2014

平成26年
基礎医学記念講堂・
医学部資料館完成式典



2019

平成31年
臨床解剖実習室(CAL)を設置



1919

大正8年
京都帝国大学
医科大学は
京都帝国大学
医学部となる

1949

昭和24年
新制京都大学発足
新制大学は4年制、
医学部は6年制となった

1945

昭和20年
原子爆弾災害
総合研究
調査班を
広島に派遣

1955

昭和30年
京都大学大学院
医学研究科設置

1899

明治32年
医科大学開設、
医学科を設置

1901

明治34年
解剖体祭挙行

1899

明治32年
附属医院に看護養成所設置



©京都大学大学文書館所蔵
医科大学全景

1918

大正7年
1918 Flu pandemic



©京都大学大学文書館所蔵「藤浪先生遺影」より
口研病院玄関一行記念撮影(ロックフェラー研究所の病院)
(前列左から2番目 野口 英世 博士
前列右から3番目 藤浪 鑑 先生)



©京都大学大学文書館所蔵
早石 修 先生 1958年(昭和33年) 教授就任



©京都大学大学文書館所蔵
医学部講義風景(病理組織最終実習)
(藤浪 鑑)



©京都大学大学文書館所蔵
藤浪 鑑 先生 1900年(明治33年) 教授就任



井村 裕夫 先生
1977年(昭和52年) 教授就任

125年のあゆみを振り返りつつ、これからの医学教育・医学研究・医療を担う本研究科にゆかりのある若手研究者の皆さんに研究の楽しさや意義等についてお話を伺いました。

インタビュー内容は下記ホームページよりご覧いただけます

京都大学医学研究科・医学部 125周年記念サイト
<https://125th.med.kyoto-u.ac.jp/interview/>



臨床現場から臨床研究へ、
 多様な視点から患者さんに
 役立つ知見を

医学教育・国際化推進センター 助教
 Yan Luo



臨床・研究から教育へ…
 医学教育研究者としての目標と
 学習者支援のための信念

医学教育・国際化推進センター 講師
 生野 真嗣



総合知で切り拓く
 未来の医療

社会疫学・白眉センター 特定准教授
 井上 浩輔



デジタルトランスフォーメーション
 による子ども
 ところとからだの健康支援

臨床認知神経科学 講師
 入江 啓輔



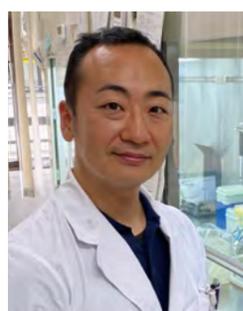
慢性炎症性疾患の根治を
 目指して…変化を楽しみ、
 変化を創り出す

メイヨークリニック 免疫・臨床免疫部門 助教
 佐藤 有紀 (腎臓内科学から留学中)



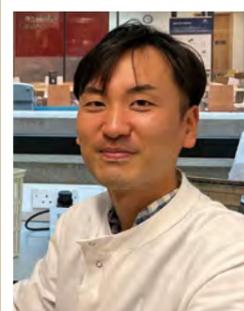
研究は現場主義を
 心がけています

脳神経外科 助教
 澤田 真寛



次世代を育む小児科臨床と
 研究への挑戦

小児科 特定病院助教
 柴田 洋史



「こんなことできたらいいな」
 という発想を
 実臨床に繋げていきたい

オックスフォード大学 招聘研究員
 諏訪 達也 (放射線治療科より留学中)



京大SPHが開いてくれた
 臨床研究の扉

薬剤疫学 特定助教
 高山 厚



研究者よし、
 市民・患者よし、
 社会よし

クリティカルケア看護学 准教授
 西山 知佳



京大から
 神経科学の最前線へ

UCバークレー校 スイス国立科学財団リサーチフェロー
 原田 征弥



婦人科がん患者の
 QOL向上と
 サポートケアを追求する

婦人科学・産科学 博士課程
 東山 希実



京都大学からの
 免疫学研究の
 新たな高みを目指して

免疫細胞生物学 博士課程
 増尾 優輝



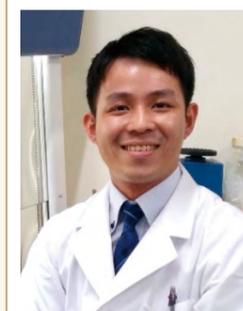
リアルワールドデータを
 駆使した整形外科の
 新たなエビデンス

京都市立病院整形外科
 榎田 崇一郎



iPS細胞技術で挑む
 新しい心臓病治療の
 開発研究

心臓血管外科 特定准教授
 升本 英利



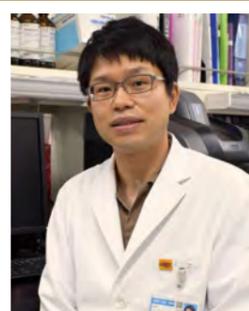
京大の自由と多様性の中で
 切り拓く未来の医療
 臨床検査技師、大学教員として

臨床ゲノム解析学 准教授
 松尾 英将



感染症研究の魅力
 微生物の世界が見える時

臨床病態検査学 准教授
 松村 康史



京都大学の地で、
 Physician scientist
 として進む

糖尿病・内分泌・栄養内科 助教
 村上 隆亮



独立研究者 (PI) として
 アメリカで
 内耳有毛細胞研究

南イリノイ大学 助教授
 三好 拓志



京都大学の若い研究者が
 未来の新しい研究世界を
 切り開きます

循環器内科 助教
 山下 侑吾



大規模ヒトゲノムデータと
 データサイエンスを用いて、
 糖尿病、肥満、心血管疾患の
 創薬標的を探索する

ハーバード大学 客員研究員
 吉治 智志



基礎医学研究の
 面白さを学び、
 伝えていく

医化学 助教
 吉永 正憲

京都大学医学研究科・医学部 創立125周年 記念事業募金

2024(令和6)年に医学研究科・医学部は創立125周年を迎えます。医学部の学生及び医学研究科の大学院生がこれからの時代を先駆ける世界トップレベルの研究発信やグローバルリーダーとして活躍する新たなる飛躍の契機とすべく、記念事業に取り組んでおります。引き続き皆様からのご寄附を心よりお待ちしております。

多目的施設の建設及び学生会館の設備改修

多種多様な学生及び教員等の連携から生まれる知の融合や人間力の形成を目的とした各種スポーツやワークショップ等が実施できる多目的施設を建設します。また、竣工より13年が経過した学生会館の設備等を改修することにより学生会館のコンセプトである医学部内のコミュニティの交流等の更なる活性化を目指します。



◀ 詳しくはこちらからご覧ください

<https://125th.med.kyoto-u.ac.jp/donation/>

申込・振込方法について

郵便局・銀行の窓口から

「寄附金申込書」に必要事項記載のうえ、下記事務局までメール、FAXまたは郵送してください。お申込は随時受け付けいたします。

Webサイトから

京都大学寄附金控除関連ホームページでご確認ください。
<https://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/exemption/>



お問い合わせ

京都大学医学部教育研究支援基金(KMS-FUND)事務局

〒606-8501 京都市左京区吉田近衛町 京都大学大学院医学研究科・医学部 管理棟1F

FAX: 075-752-1528、075-753-4348 E-MAIL: 060kms@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp



編集後記

本医学研究科・医学部は2024(令和6)年に創立125周年を迎え、記念誌とホームページ特設サイトを作成いたしました。ご支援いただきました皆様に感謝申し上げます。

医学部創立100周年記念アルバム「近衛町無番地」を湊長博先生が中心に作られて25年になり、この間にお二人がノーベル生理学・医学賞を受賞されたことは我々の誇りです。これからの25年は、医療AI、遠隔医療、ビッグデータ、モバイルヘルスなどの医療DXや、再生医療、遺伝子治療、新規医薬品・医療機器など革新的進歩を遂げているものと思います。

2025年夏にはスポーツやワークショップができる「多目的施設」を建設いたします。学生や教員の交流から生まれるコミュニケーションや多分野融合から生まれるイノベーションを期待しています。

京都大学医学研究科・医学部 教授
125周年事業運営委員会 委員
大森 孝一



京都大学医学研究科・医学部創立125周年記念誌

2024年7月発行

発行者・編集 — 京都大学大学院医学研究科・医学部
125周年事業運営委員会

統括 — 京都大学大学院医学研究科長・医学部長 伊佐 正
今中 雄一、大森 孝一、藤田 恭之、柳田 素子、井本 憲、
総務企画課

制作・印刷 タカラサプライコミュニケーションズ株式会社



基礎医学記念講堂・医学部資料館